

# 今年の長崎の空は、晴れるだろうか。

2013/12/14

郵政産業労働者ユニオン長崎、中島義雄

本文は、「地域と労働運動 12月号」に掲載された長崎からのレポートです。

## 1、長崎の南京集会で。

12月12日、長崎の岡まさはる記念・長崎平和資料館主催で、第13回長崎と南京を結ぶ会が開かれた。12月13日は南京大虐殺事件から76年目の日であるが、現地、南京市から生存者を招いて、毎年、長崎で集会は開かれている。

長崎の地は、二代続けて市長が右翼のテロに会うなど、厳しいところだが、この日も昼間は右翼の街宣車が市内を回り、夜の集会に数人が来場し、「南京事件のとき、城内で中国軍はどうしていたのか」などと質問を行い、中国側の講師に回答を迫るシーンが続いた。この日は口論だけで済んだが、次第に空気は緊迫している。

この集会の主催者は岡記念館だが、旧来からここと交流がある郵政産業労働者ユニオン長崎は、こうしたとき応援要請がある。私たちも少ない人数だが、場内整理の応援団として参加している。

南京集会も岡記念館も目的は、先の戦争の日本における加害責任をどう考えるかにかかっているし、無論、私たちも、戦後責任の一環として、こうした取り組みを続けている。

本来、闘う人々はこうした闘いを支え、右翼や反動国家との直接対決の場であるこの運動を、進めるべきだが、従来からの労組は、「市民運動とは距離を置く」存在で、支援者は少ない。労組や労働者も自分の組合や自分の労働条件も大事だが、国のありようの基本を決める政治にかかわらずに、未来はないのではないか。

労組も、少数の岡記念館スタッフに、このような運動を任せ、距離を置くだけでは、社会的労働運動たり得ない。

戦前がそうであったように、また、ナチズムがそうであったように、国民（労働者）が沈黙しないうちに、きっちり闘いの旗を上げ、国の方向、形を守るという闘いでつながり、相互信頼の上で、労働者連帯の心を共有したいものだ。

## 2、12/5 特定秘密保護法抗議で共同行動が。

そうした長崎だが、12/5は少し違った。特定秘密保護法可決という緊張が、労働者や労組、政党の背中を押した。長崎では89年の労働界再編以降初めてと思うが、地区労と県労連、社民党、共産党、民主党など、連合を除くすべてが、一緒になり統一集会を緊急で開き、550人を集め、デモを行った。国が重大決意で、国民に攻撃をかけてくるとき、私たちは「俺が」「お前が」と違いを言い合っている場合ではないのだと、実感できる。

憲法改悪の先取りとされるこの法の可決は、国を変えた「クーデター」と呼ぶ人も多い。こうしたことを思うなら、この一日だけの一点課題の共同闘争を連帯につなげ、統一戦線的な組織を作り上げ、文字通り、国民の命と存在を守る労働運動に生まれ変わることが大事ではないか。

聞けば、ほかの労組でも、実態的な共同闘争もあると聞く。それぞれの地と部署で、労組のありようを変え、国や会社に勝てる労組を再生する。その第一歩が、共同闘争と緊急統一戦線なのだ。私たち郵政産業労働者ユニオン長崎はこの道を歩む。

### 3、少数派労組の今と明日。

一昨年、郵政内の少数派労組のトップバッターであった全福郵労が解散をされた。組織減からくる選択だったようだ。私たち郵政産業労働者ユニオン長崎の前身、郵政長崎労組の時代から、いくつも教えをこうことで、ここまでこられたのだが、郵政の職場にとって厳しい環境が増すばかりのこの時期に解散とは、実に惜しいことだった。

また長崎でも、少数派労組の全国のさきがけであった長船（第3組合）が、先日解散をされたと同った。最後の現場組合員が三菱を退職されたからだが、71年の結成以降、42年間の素晴らしい闘いの実績を持つ労組も、組織減では致し方ない。

さらに昨年、国労は23年間闘った解雇者（闘争団）を組織外としたために、九州でも現場 JR 組合員だけの組織となり、組織は激減している。長崎の国労も同じだ。

このように私たちの周囲にあった闘う反対派労組の解散、組織減少は郵政ユニオン長崎も同様であり、日本の共通の特徴とはいえ、今後の運動のありようを考えさせられる。本来ならば、労働運動専門誌の「地域と労働運動」ならばこそ、これらそれぞれの労組の栄枯盛衰を歴史的、運動的に評価して、日本全体に教訓化し、今後に生かすべきだと思う。国労などはすでに多くが書かれているが、なお、お願いしたい。

### 4、全労協・西日本春闘討論集会の長崎開催で。

そして今年2月22—23日で、全労協・西日本春闘討論集会が初めて長崎で開かれる。この集会は西日本4地区が交互に受け持ち、ほぼ4年に一度、九州でも開かれてきた。これまでも、06年と10年も長崎開催の話はあったが、私どもの非力さで、環境が整わず、長崎では開かれなかった。

そして、昨年（2013）12月初め、福岡で準備会が開かれ、西日本集会が決まった。長崎としては20年来の出来事であり、全力でこれを成功させたいと考える。

準備会では長崎開催の意義を、今度の春闘討論集会の目玉は、安部の労働破壊との闘いである。とりわけ、郵政は企業特区的に労働破壊の先取り=新人事・給与制度などが、労使一体で進んでいる。これとの闘いなしに、春闘は

ない。そういうなか、郵政九州の拠点である長崎での開催は、時期も場所も課題もベストであると意思一致ができ、開催となった。

すでに全労協の全国新聞でも、新年号に長崎集会への参加要請を行った(予定)。読者各位へも、この集会へのご参加を要請したい。日時は2月22日～23日(土日)で(13時から12時まで)、場所は長崎市桜町9-6の長崎地区労会館である。

## 5、そして長崎の職場では

労働破壊の企業特区的存在の郵政のいまである。

一口でいうと「やられてられない」のである。慢性的な人不足は全国共通で、13年暮れは4時間残業が連日続き、組合は会議も集会もできないほどだった。無論働く人は疲れ切って、正直モノを考えたくないと言っている。

労組がこれほど必要なときに、労組が闘えない現実には、攻撃にすさまじさを感じさせるし、また過去の歴史をも思い浮かばせる。戦前、労働者が国と戦争を大事にした結果、労組は解散し、産業報国会に作りかえられた。

いま、電力労組は、企業防衛から、原発の再稼働はおろか、新規建設すら要求している。九州電力では二期続けてボーナスがゼロでも文句が出ない。金がない人には退職金を前借させるという全く驚くべき労使の解決策が出ていても現場はじっと我慢だ。

これは郵政でも同じだ。現場では非正規契約社員が過半数を超えても、正社員の組合運動が幅を利かせ、権利回復などおぼつかない。すでに非正規と正社員の間に位置する限定正社員である新一般職が4月から始まる。賃金が6割となる賃金抑制策だが、現在の非正規社員も正社員になってもここだ。まるで詐欺ではないか。また正社員も勤務評価で、ここに落とされる危惧がささやかれている。しかし、多数派のJP労組はこれに賛成した。そして会社はさらに賃金を2割もカットし、それを働いた人の成果主義で再配分する賃金制度、業績手当が、これも4月から始まる。

これまでのように、闘う人も一応解雇されずに、最低の賃金ながら確保し、会社に抵抗して生きていくことはさらに難しくなる。なぜならば、手当の割増は上司のさじ加減であり、営業成績がその一番であるからだ。自腹をして、営業成績を上げなければ、生きていけない時代が4月からさらに強まるのだ。これで反乱がおきない多数労組とは、かつての権利の全通ではない。

郵政産業労働者ユニオン長崎支部や九州地方本部では、昨年暮れ、九州の空白県の郵政の職場にビラまきを行い、ユニオンへの結集と闘いを呼びかけたが、これがなかなか重い。会社あつての社員、国あつての国民。こうして多数に依拠し、生きていくことはさらに厳しさを増すのだが。現状変革に動かない。そこで最後は完全鎮圧された労働運動とならないためにも、郵産ユニオン長崎は頑張りたい。

長崎の支部は、元旦の中郵での門前早朝ビラまきを結成以来25年間続けて

いる。今年も同じだ。そして1月11日の年末年始の激務がようやく終るころ、支部の旗開きを開き、今年も運動をスタートさせる。長崎の空は、今年は晴れるだろうか。